

# 生活時間の構造から見る居住空間と住まい方に関する研究

## － タイ北部タイヤイ社会のS村を事例として －



### Keywords

生活構造 生活時間 居住空間  
行動分類

K10109 山田 奈佳

### 1. はじめに

#### 1.1 研究背景

私たち人間は、時空間の中で生活している。しかし、世界のすべての民族集団が私たちと同じ1年の観念を持っているとは限らない。年齢を数えるのに雨の季節が訪れた回数を用いる地域があるという。同様に農耕民族では、雨季の始まりとともに農耕を開始し、乾季とともに作物が収穫され、その収穫の回数が年齢とされていることがあるという。しかし、このような事例は自然条件として雨の降り方が極めて規則的、定期的に巡ってくる必要がある。そこで、民族集団がどのような1年という観念を持っているかが問題となる。

時間と空間は密接にかかわっている。その意味では本来、時間と空間の双方について、研究することが必要だ。空間や生活を考えるうえで時間は無視できないものである。また、生活時間は、生活の実態を把握する有効な指標である。建築計画の研究において生活時間という指標を用いて、空間に反映される法則性を明らかにしていくうえでも、一定時間での周期性に注目することは必要である。本研究は、住居内での生活を考えるうえで基本となる1日という単位時間の中で繰り返される生活過程を明らかにする。生活は基本的に時間と空間の二側面から成り立つ。生活時間調査とともに部屋別の使われ方等を検討することで住生活の実態をより深く把握することができるのではないだろうか。

#### 1.2 研究目的

本研究では、住居を含む生活空間をその土地にある固有の時間に注目しながら考察する。今回対象としたのはタイ北部の国境地帯に住むタイヤイの社会である。タイヤイは、現在でも仏教的慣習や儀礼が生活と密接に関わっている。また、生活時間も都市部とは異なるかたちで組織されていると考えられる。都市化が続く社会では住居をはじめとする空間は、特徴のない量産されたものになってきている。一方、都市部から離れた土地では、その土地の生活リズムが残り、自らの生活に則した空間で暮らしている。本研究では伝統的な生活や住居が残る村を調査対象とし、生活時間構造と空間の使われ方の関係を追求する。

本研究では、生活時間と空間を決定する要素として気候や生業、仏教的慣習に着目する。実測による居住空間

の理解とこれらの点に関するインタビュー調査を基にタイヤイ社会における居住空間と住まい方を研究し、合わせて空間に生活時間がどのように影響しているのか考察する。

#### 1.3 調査方法

調査期間：平成25年9月4日～9月18日

調査地：タイ チェンライ県 S村

調査方法：14日間のフィールドワークを行い、インタビューと住居の実測を行った。

・実測調査 平面図（1/50）、屋敷図（1/200）を実測により作成し、24軒のデータが得られた。図面には、空間の構成を理解するために空間内の家具など生活物品も記入した。

・インタビュー調査 職業や年齢、家族構成などの基本情報や1日の生活行動、儀式の内容、祭壇、柱の意味などについて聞き取りを行い、24軒のデータが得られた。

### 2. 調査地の概要

#### 2.1 タイの概要

東南アジアの中心に位置し、国土面積は約51万4000平方km（日本の約1.4倍）ミャンマー（旧ビルマ）、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接している。

気候は熱帯性気候である。年間の平均気温は約29℃で、バンコクでは一番暑い4月の平均気温が35℃、一番涼しい12月の平均気温が17℃。季節は11月～2月の乾季、3月～5月の雨季、6月～10月の雨季がある。

人口は約6000万人で、民族は、タイ族が約85%、中華系が10%、他にモーン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系が暮らしており、山岳部にはそれぞれの文化や言語をもった少数民族が暮らしている。王室を始め、タイ国内の9割以上は仏教徒で占められている。そのほとんどが上座部仏教である。

#### 2.2 北タイの概要

北タイはタイ王国の北部の地方である。文化や経済の中心はチェンマイである。北タイ族と呼ばれるタイ系の一民族がランナータイ王朝を建てたことから始まり、王朝が減じるとビルマの占領を受けた。そのためミャンマーの文化の影響を受けて独特の文化を作り上げた。比較的気候が涼しく山岳地帯の多い地域である。特に北部は山岳地帯になっていて、多様な山岳民族が住む。

### 2.3 S村の概要

村の面積は約3k m<sup>2</sup>、人口は約900人で住居は205軒あり、本調査で対象とするタイヤイはそのうち約40世帯ある。その他の民族は北タイ族である。村の北東部には北に向かって幹線道路が通っていて国境の街メーサイへと続いている。村内では、鶏などの家畜が放し飼いにされている。また、犬や猫を飼っている村人が多い。電気と水道は全ての家庭で利用されているが、プロパンガスの普及は数少なく、20%にとどまっている。また、タイヤイでは移住の際に近親者を頼って逃げてきた者が多く、近親者と近くに暮らす傾向がみられる。

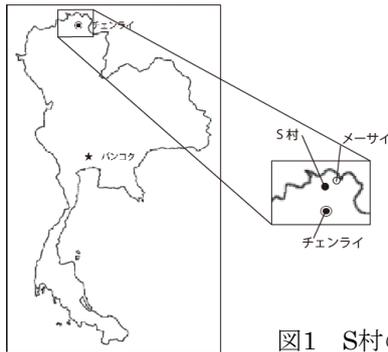


図1 S村の位置

### 2.4 S村のタイヤイの移住

タイが近代国家として再出発した19世紀後半以降に正規の手続きをせずに移住した少数民族は、土地の登記証を持たず、生業を営むべき森林を自由に使えず、国籍を持たない者が多数いる。S村のタイヤイもまた、長い移動の果てに現在のタイとミャンマーの国境を経てタイへと移住してきた。彼らは、隣接する民族との軋轢や、ビルマ軍による過酷な強制労働から逃れるために次第に南下を始め、タイの国境地帯に住むようになった。そして、そのころまでに現在のミャンマーを支配していた英仏植民地政府とタイ政府との間で国境が定められたため、彼らを不法入国民としての立場に追いやってしまった。

## 3. 村人の生活

### 3.1 宗教的慣習

#### ・パンサー

雨季にあたる陰暦8月から11月の満月の日のことで雨季は新しい命が芽生える季節とされ、それらを踏み殺さぬよう僧侶たちは遠出を避け、寺院に籠もって修行に励む。一方で在家者はこの間、修行に必要となるろうそくを集めて寄進する催しを行う。パンサーの始まりの日をカオ・パンサー、終わりの日をオーク・パンサーという。

#### ・ワンシン

ワンシンとはタイの仏日のことで、陰暦の「新月」「上弦」「満月」「下弦」に相当する日のことである。多くの仏教徒が、寺に参拝する日である。

### 3.2 祭壇

タイでは家の中と家の外の敷地内に祭壇が設けられている。前者をヒンプラ、後者をチャオ・ティーという。

ヒンプラは仏壇のことで、人が集まりやすく、目につきやすい居間にあることが多い。チャオ・ティーは家の外部の一角に建ててあり、その土地の神様を祀る、土着信仰（アニミズム）の社である。また、タイ北部で信仰の強いテーワダーとはその土地を守る守護神のような八百万の神のことである。タイヤイもまた、ヒンプラとチャオ・ティーを持つ。



写真1 祭壇(チャオ・ティー)

### 3.3 住居空間

S村の住居はコンクリート造が18軒、木造は2軒、コンクリート造と木造の混構造の住居が4軒あった。また、地床式が19軒、中床式が2軒、高床式が3軒であった。築年数と床レベルの関係は図2のようになった。調査対象の住居のうち、高床式と中床式は、改築した高床式を除いて、全軒が20年以上前に建設されている。コンクリート造の地床式は1軒を除いて19年前以内に建設されていることがわかる。木材の入手困難や高騰によって、1980年後半以降に建設された住居はコンクリート造がほとんどを占めている。木造に比べて安価で建設できる地床式のコンクリート造が普及していることがわかる。

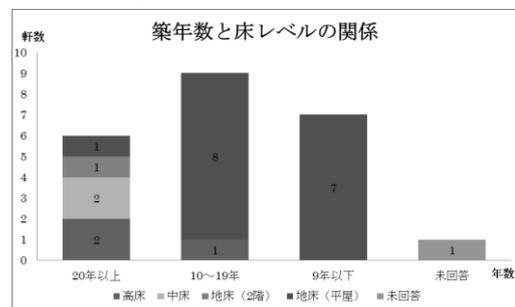


図2 築年数と床レベルの関係グラフ

## 4 生活時間構造の分析

### 4.1 全体の傾向

はじめに、1日の多くを占める睡眠時間に注目する。起床時間と就寝時間はそれぞれの仕事の形態の違いにより、ばらつきがみられた。起床時間は4時から6時にピークが来ている。特に目覚まし時計を使用している様子はなく、自然に起床している。実際に現地の民家に宿泊した際には、早朝の3時過ぎから家畜の鶏が鳴き出し、起こされた。本調査を行った9月上旬のタイ王国の日の出は6時、日の入りは18時30分であった。多くの家庭が日の出の前に起床し、活動を始めている。そして日の入り近くの18時頃に仕事を終え夕食にしている。20時ごろからテレビ鑑賞をしたり早い者は就寝したりしている傾向がある。睡眠時間にも大きな差があり、睡眠時間の最大の差は8時間に

なった。睡眠が多い村人は、高齢となり働かない者が多数である。平均の8.0時間を下回り、睡眠が十分でない村人は若く働きに出ている傾向がある。平均は次のようになった。起床：5.6時、就寝：20.3時、睡眠：8.0時間

次に、住居滞在時間を集計する。ここで述べる住居滞在時間とは、1日の住居で過ごす時間のうち睡眠時間を除いた時間とする。そして1日から睡眠時間を除いた時間を活動時間とする。活動時間に占める住居滞在時間の割合を比較すると、3～10割とばらつきがみられた。要因として考えられるのは、被インタビュー者の年齢層が26歳～93歳と幅広く、働いている者や、退職してほとんどの時間を自宅で過ごしている者がいることである。さらに、職も農業や建設工、内職、食堂、家政婦、アルバイトなど多様であったことが理由として考えられる。平均は次のようになった。住居滞在時間平均：10.7時間

#### 4.2 生活時間の分類方法

データ分析として行動分類を行う。行動の分類は、総務省統計局「平成23年社会生活基本調査 詳細行動分類による生活時間」に用いられている分類を参考にして、インタビューで得られた1日の生活行動内容からまとめた。分類は表1のように行った。

表1 分類の方法

| 大分類  | 中分類                | 小分類              |
|------|--------------------|------------------|
| 必需行動 | 睡眠                 |                  |
| 社会行動 | 自宅外労働              | 農業<br>自営業<br>建設工 |
|      | 自宅内労働<br>家事        |                  |
| 自由行動 | 休息<br>TV鑑賞<br>レジャー |                  |

行動分類は、大分類、中分類、小分類に分かれる。本研究では、大分類のうち必需行動と社会行動と自由行動を取り上げる。理由としては、先進国と比べて行動の多様性が低いと考えられたので、必要最低限の分類とした。中分類では、継続的に30分以上の時間を要する行動を取り上げた。本来ならば、食事も取り上げるべきだが、正確に時間を聞き取ることができなかったので、ポイントの行動としてとらえ、行動分類には用いない。データ集積には中分類を用いる。しかし中分類は項目が多いので、後の4.4に記述する分析は大分類を中心に行う。

行動分類の際、休息とテレビ鑑賞の境界が曖昧な答えだった場合は休息とカウントした。レジャーとは、住居から離れて友人を訪ねたり、市街地へ買い物や病院以外の目的で出かけることを指す。自宅外労働とは、住居の外へ働きに出ていることをいい、対して自宅内労働とは内職や長時間に及ぶ仕事の準備のことを指す。

#### 4.3 分類結果

24軒分のインタビューを基に行動分類の中分類の時間の統計を取った。そして男女別に平均値を出した。図3の①が男性、②が女性のデータである。大きな差がみられたのは、家事と休息の項目であった。女性が家事全般を担う家庭がほとんどで、男性の家事とは言っても、女性と共同で行われサポートするというかたちが多かったため、このような結果になったと考える。男性は家事にかかる時間が女性に比べて少ない分、そのまま休息の増加に反映されている。また、レジャーでは、男性女性とも1時間に満たず、女性は0時間であった。自由時間の娯楽要素はテレビ鑑賞が圧倒的であり、都市部から離れた北タイの生活が表れているといえる。労働に関しては、平均を比べると男性女性ともに自宅外労働が自宅内労働を上回っている。自宅内労働は女性の方が0.6時間多い結果になっているが、労働時間は男女に大きな違いは見られない。男性と女性の間で労働に対する意識の違いはなく同等に働いている。しかし掃除や洗濯、食事といった家事は女性が負担していることが読み取れる。

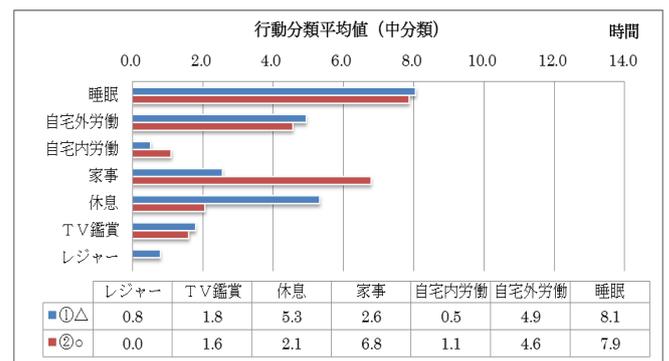


図3 行動分類平均値のグラフ

#### 4.4 生活行動の類型化

ここでは、24軒分の中分類のデータ集積結果を基に生活構造を類型化する。類型化するに当たって2回データを操作する。第1分類は、社会行動の中分類3項目の中で上位の値の項目による分類を行う。ここでいう上位とは、平均値との差を比較しプラスであるほど上位であることにする。社会行動で最上位が0.5以上の項目が平均値を下回る場合は自由行動の中分類の上位を第1分類とする。

第2分類は社会行動と自由行動の中分類の中で2番目に上位である項目で分類する。上位であっても平均値に満たない場合は第2分類なしとする。この操作によって、対象者の生活の重点が見えてくる。さらに、中分類で分類された型を大分類に帰属させ大きく5つに類型化する。例) 住居No.1の女性は中分類により【休憩 (第1分類)】×【テレビ (第2分類)】という型になる。そして、大分類に帰属させると【自由】×【自由】型となる。例に倣って、24軒分のインタビューを基に、個人ごとに行動分類と類型化の操作を行った。

【社会】×【社会】型 13人（男性5人女性7人）  
20～40代の子持ち世代で、活動時間のほとんどを労働や家事に捧げている。

【社会】×【自由】型 13人（男性5人女性9人）  
労働をしながら休息やテレビの時間を十分確保している。

【自由】×【自由】型 7人（男性3人女性1人）  
高齢になり、仕事を持たず活動時間のほとんどをのんびり過ごし、かつテレビを見ることが多い。

【社会】型 8人（男性2人女性6人）  
長時間の労働、または専業主婦で長時間の家事をこなしている。自由時間はほぼない。

【自由】型 3人（男性2人女性1人）  
高齢となり仕事を持たず、特に家事もせずに活動時間のほとんどをのんびり過ごす。テレビをあまり見ない。

## 5 生活時間の構造と空間の関係

### 5.1 生活時間と使われる空間

それぞれの生活によって住居に滞在する時間や行動は様々である。その人なりの生活の仕方が住居空間に表れているはずだと考える。ここでは、住居内での行動のみを考えることとする。

### 5.2 類型別住居分析事例

【社会】×【自由】型 住居No.2

男性66歳と女性56歳の夫婦は共に【自宅外労働】×【テレビ】型になった。図4と図6では住居内で行う社会行動を黄、自由行動を青で示し行動と空間を対応させた。

生活の特徴として、毎日朝食時には二つの祭壇に食事を捧げ、帰宅後にはお祈りをする。平面構成は、3つある扉をあえてずらしている。これは悪いものが通りにくいようにという考えによるものである。扉の上にはおまじないとして紙が貼られていた。この住居の間取りには、このような信仰が根付き、守られ、反映されている。

活動時間の主な生活空間は居間と炊事空間の一部である。住居滞在時間が少ないこともあり、部屋の広さもモノの数も必要最低限であると思われる。



図4 1日のタイムスケジュール

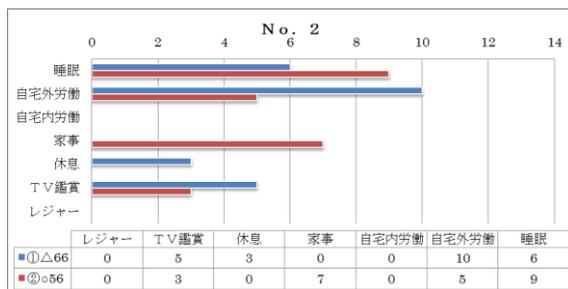


図5 行動分類のグラフ

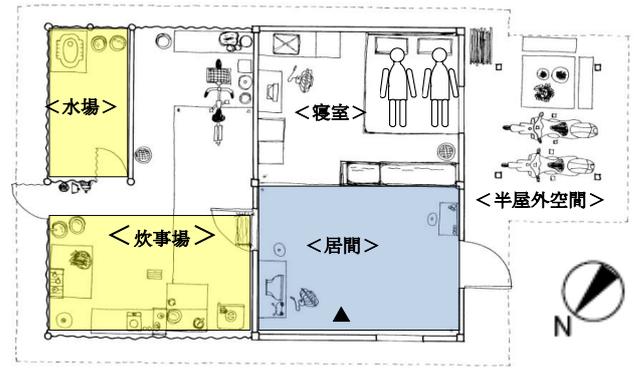


図6 住居No.2 平面図

## 6 まとめ

5.2に倣って、タイヤイの住居空間をモデル化する。空間構成要素は居間、寝室、炊事場、水場、半屋外空間の5つとする。5つの類型の空間の使い方の傾向は図7のようになった。いずれかの分類に【社会】が含まれる型では炊事場と居間、同様に【自由】が含まれる型では半屋外と居間が頻繁に使われる傾向がある。また、【社会】型と【自由】型の偏った生活では、居間があまり使われないことがわかった。

| モデル図  | 【社会】×【社会】 | 【社会】×【自由】 |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
|---|-----------|-----------|-----|----|----|--|---|-----|----|-----|----|----|--|---|-----|----|-----|----|----|--|
| <table border="1"> <tr> <td>炊事場</td> <td>居間</td> <td>半屋外</td> </tr> <tr> <td>水場</td> <td>寝室</td> <td></td> </tr> </table> | 炊事場       | 居間        | 半屋外 | 水場 | 寝室 |  | <table border="1"> <tr> <td>炊事場</td> <td>居間</td> <td>半屋外</td> </tr> <tr> <td>水場</td> <td>寝室</td> <td></td> </tr> </table> | 炊事場 | 居間 | 半屋外 | 水場 | 寝室 |  | <table border="1"> <tr> <td>炊事場</td> <td>居間</td> <td>半屋外</td> </tr> <tr> <td>水場</td> <td>寝室</td> <td></td> </tr> </table> | 炊事場 | 居間 | 半屋外 | 水場 | 寝室 |  |
| 炊事場   | 居間        | 半屋外       |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 水場  | 寝室        |           |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 炊事場   | 居間        | 半屋外       |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 水場  | 寝室        |           |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 炊事場   | 居間        | 半屋外       |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 水場  | 寝室        |           |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 【自由】×【自由】   | 【社会】      | 【自由】      |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| <table border="1"> <tr> <td>炊事場</td> <td>居間</td> <td>半屋外</td> </tr> <tr> <td>水場</td> <td>寝室</td> <td></td> </tr> </table> | 炊事場       | 居間        | 半屋外 | 水場 | 寝室 |  | <table border="1"> <tr> <td>炊事場</td> <td>居間</td> <td>半屋外</td> </tr> <tr> <td>水場</td> <td>寝室</td> <td></td> </tr> </table> | 炊事場 | 居間 | 半屋外 | 水場 | 寝室 |  | <table border="1"> <tr> <td>炊事場</td> <td>居間</td> <td>半屋外</td> </tr> <tr> <td>水場</td> <td>寝室</td> <td></td> </tr> </table> | 炊事場 | 居間 | 半屋外 | 水場 | 寝室 |  |
| 炊事場   | 居間        | 半屋外       |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 水場  | 寝室        |           |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 炊事場   | 居間        | 半屋外       |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 水場  | 寝室        |           |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 炊事場   | 居間        | 半屋外       |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |
| 水場  | 寝室        |           |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |   |     |    |     |    |    |  |

図7 類型と使われる空間のモデル図

住居空間やモノには住人の生活時間が表れる。本研究の調査地の住居の空間構成を決定する要素として、気候と移住という社会環境、木材の高騰という経済環境、そして仏教の信仰が大きく影響している。これらは外的要因であり、同じ地域で生活する限り、大きな違いは生まれにくい。しかし、空間の使い方は住人によって異なる。その違いを生むのが、内的要因である。本研究の生活時間の行動分類に従った類型化によって、内的要因のひとつが生活時間の違いであることがわかった。同じ村でも多様な生活時間が存在する。外的要因と内的要因と住居空間の関係性は、調査地に限らず、すべての地域で言えることである。住居空間を分析、または計画する上で、生活時間からアプローチすることは有効な手法である。

### 参考文献

- 1) 綾部恒雄 林行夫『タイを知るための60章』明石書店,2008年
- 2) 田中麻里 『タイの住まい』圓津喜屋, 2006年
- 3) 村上忠良「タイ国境地域におけるシャンの民族内関係」